

定年退職の方々を送る

東大での半世紀

学生時代も含めると46年間、ほぼ半世紀にわたってお世話になった東大をいよいよ定年退職することになりました。東京天文台と理学系研究科を合わせると在職期間は34年になります。天文学者になることを目標にして東大に入学し、望み通り天文学者になれたので、これ以上の幸せはないと言うべきでしょう。

私が研究者として過ごした時代は、私の専門とする銀河天文学と観測的宇宙論がまさに怒濤のように進歩した時期です。私が研究を始めた頃は、宇宙で最も遠方の天体は約50億光年の距離にありました。それが今では130億光年先の天体まで確認されています。ビッグバンのわずか7億年後まで、宇宙の進化を遡って見る事ができるのです。赤方偏移(距離)の測定された銀河の数は、約1000個から150万個以上になりました。このような学問の急成長期に研究生生活を送れたことは、さらに幸せなことでした。

長い間世界に追いつくための努力を続けましたが、木曾観測所でモザイク CCD カメラの開発を始めた頃から世界の先端

岡村 定矩 (天文学専攻 教授)

に手が届くようになりました。すばる望遠鏡が稼働し始めてから、多くの若者の活躍で、日本のこの分野は今や世界の第一線です。ここまで来られたのは理学系研究科のすばらしい研究環境の賜と感謝しています。

在職期間の終わり頃には、思いがけずも大学の管理運営に深く関わることとなりました。理学系研究科長を務めたのは、国立大学の法人化をまたぐ2年間で、まさに激動の時期でした。多くの方々の協力を得て、新しい形態のもとでの研究科の運営の仕組みを作り上げました。その後、ハラスメント相談所長を1年間務めた後、小宮山総長のもとで理事・副学長を3年間務めました。科研費繰越から始めた競争的資金のルール改善、博士課程学生への経済支援策と新しいRA制度の創設、世界トップレベル拠点の制度設計、部局横断型教育プログラムの創設、旅費制度の改訂などは一定の成果を挙げられましたが、先送りした問題も枚挙にいとまがありません。このような管理運営の仕事の中でも、多くのすばらしい方々と



出会い、ご支援をいただきました。こうした中で、東大と社会の関わり方の複雑さを学び、また、東大のもつ多様性、言い換えれば懐の深さも実感しました。最後の3年間は、社会人向けの教育プログラム「東大EMP」に関わるいっぽう、学生向けの「エグゼクティブ・プログラム」の開講責任者として多くの講義を聴講し、学生ばかりでなく私の視野も大きく広がりました。

思い返せば物心ついて以来ほとんどの期間を東大で過ごしてきたように感じます。すばらしい研究環境ですばらしい方々に出会えた東京大学の今後の発展を心より願っております。長い間ありがとうございました。

岡村定矩先生を送る

嶋作 一大 (天文学専攻 准教授)

岡村先生は、理学系研究科長や副学長などを歴任され、強力なリーダーシップを発揮されました。教育・研究環境からキャンパスの住み心地まで、多くのみなさんが何らかの恩恵を受けているのではないのでしょうか。千里の道も一歩から。20年以上前、木曾観測所にお勤めの頃、備品のスティック糊の銘柄まで自ら吟味して、これが一番貼りやすいんだよ、とおっしゃっていたのを思い出します。

先生のご専門は銀河天文学と観測的宇宙論です。銀河の構造や宇宙の距離尺度

の研究のほか、世界最大の CCD カメラを何度も開発されるなど、物づくりでも傑出した業績をおもちのスケールの大きな科学者です。その人望から、日本天文学会の理事長や国際天文学連合の部会長などもなさっています。

先生は、すばる望遠鏡の計画時に、主焦点の設置を強く主張して実現させ、そこに取りつけるカメラまで開発されました。広い視野を確保できる主焦点はすばる最強の武器であり、遠方宇宙の観測などで他国の望遠鏡を圧倒する成果を上げていますが、計画当初は、コストのかかる主焦点などいらないという意見が支配的でした。先見の明ありです。

先生は学生を手取り足取り指導なさるわけではありません。うまくほめてやる

気にさせ、あとは辛抱強く見守るのです。要所的な確かなアドバイスがあるので、学生は安心して研究を進められます。人物眼(と楽観的なお人柄?)あってこそその指導法です。なお、論文執筆とプレゼンテーションの指導は、参りましたというくらい厳しいものです。

先生はふだんはたいへんにこやかで、講義での楽しそうな話しぶりに、ファンも多かったようです。学生の人生相談もなさっていたとのこと。われわれ教員も、どんな問題も即座に解決して下さる先生に頼りきりでした。退任で教室も寂しくなり、われわれも心細いですが、先生が新天地でどんな活躍をされるのか楽しみでもあります。長い間本当にありがとうございました。

退職にあたって

神谷 律 (生物科学専攻 教授)

1992年に名古屋大学から着任して、気がつくと20年も経ってしまいました。この間、大学には独法化という激震があり、研究環境にもいろいろな変化がありましたが、なんとか定年まで無事に切り抜けられそうで、ほっとしています。理学系研究科の多くの方々のご努力のおかげだと心から感謝しています。

私の周辺で起こったとくに大きな変化は、1995年に動物学、植物学、人類学の3つの専攻が統合されて、生物科学専攻が誕生したことです。それから今日まで、旧3専攻と新たに加わった進化多様性生物学講座の教員が、年ごとに親密になっていくのを実感してきました。最近では当時から懸案だった学科レベルの統合も行われ、次の課題として生物化学専攻との一体化への模索が始まっています。生物科学の広がりや学問的に共通した基盤を考えれば、理学系の生物科学研究室は1つの専攻にまとまるのが自然です。その変化の過程に少しでも参加できたことは、幸いでした。

研究では真核生物の繊毛(=鞭毛)の運動機構をおもなテーマにしてきました。繊毛は真核生物が誕生して以来存在

し続けている重要な細胞器官です。繊毛が生えないとヒトや動物は生きていけません。最近その重要さが広く認識されて、世界的に多くの研究が行われるようになりました。この分野では分子レベルの研究に適したクラミドモナスという単細胞の藻類が活躍しており、私もこの生物だけを材料にして研究してきました。幸い研究室には分子生物学に強いスタッフと学生が揃っていましたので、なんとか先頭集団を走りつづけることができたように思います。とくに、ダイニンという力を出すタンパク質の素性を明らかにすることで多少の貢献ができたかと自負しています。

研究の多くは大学院生がやってくれたものです。在籍した大学院生のほとんどは勤勉な研究好きで、一言でいえば優秀な学生たちでした。しかし当然のことですが、それぞれがユニークな個性をもち、研究の進め方も実にさまざまでした。振り返ると、あの学生でなければできなかったらと思う研究も多く、多様な学生の存在が研究の広がりのためにひじょうに重要だったと、あらためて思います。いっぽう、最近、研究を始めたばかりの



学生をいろいろな局面で「評価」する必要がありますが出てきていますが、学生の資質を簡単な尺度で比べることはできない、というのが率直な気持ちです。理学系研究科では、時代の流れに抗して、できるかぎり大学院生の評価はしないという方針にできないものかなと、ずっと思ってきました。これから少しでもそのような動きがでてくることを願っています。

最後に、専攻全体がまとまり順調に運営されているのは、教員同士の親密さに加えて、事務室の方々の支援があったことです。以前専攻長をしていた時に、そのことを痛感するできごとがありました。いま、専攻はまことに平和で、私は安心して去ることができます。専攻の構成員すべての方々と事務室の方々にあつく御礼を申し上げます。

神谷律先生を送る

岡 良隆 (生物科学専攻 教授)

神谷先生は東京大学教養学部基礎科学科をご卒業後、名古屋大学大学院理学研究科で学位を取得されました。名古屋大学で助手、助教授を務められた後、本学の教授に着任されました。学生時代に細菌の鞭毛繊維が環境条件によって左巻きらせんから右巻きらせんに変換する構造転移現象を発見され、その機構の解明に大きく貢献されました。この研究は国際的にとても有名です。1980年代からは、同じ「鞭毛」といっても細菌鞭毛とは実体の全く異なる真核生物鞭毛に関し

て、常にこの分野の先端で運動機構の研究を行ってこられました。神谷先生の研究は、生物物理学、細胞生物学、遺伝学などの広い範囲にわたり、それぞれたいへん独創的なものとして知られているのですが、中でも、クラミドモナスというモデル生物の突然変異株を使って、鞭毛の運動が多種類の力発生分子(ダイニン)の協調によって起こることを明らかにした研究や、鞭毛の振動運動が鞭毛内部構造の一部のみで起こるといふ意外な事実の発見は、国際的に高く評価され、この分野に大きな影響を与えています。

神谷先生は、研究以外の面でも、生物科学専攻の一体化に大きく貢献されました。とくに、気さくな人柄と同時に、肝

心なときに重要な発言をされる面を持ち合わせた独特のキャラクターで2003-2004年には専攻長として専攻をリードしていただき、専攻全体の雰囲気をついにへん風通しのよいものにしていただきました。このようにして、常に専攻全体をリードしてきてくださった神谷先生が退職されるというのは、私たちにとっても、まだ全く実感を伴わないことです。しかし、定年退職された後も、いつでも、愛車の自転車に乗って自宅から気軽に2号館に立ち寄って私たちのことを見守っていただきたいと思っております。これからは、大好きな自転車に乗られるときも、ぜひ気をつけて、いつまでもお元気で活躍ください。

ミクロとマクロの世界に魅せられて

久保野 茂 (原子核科学研究センター 教授)

田無キャンパスにあった原子核研究所に着任してから、あっという間に32年が過ぎてしまいました。

原子核研究所では、大型加速器計画で浮足立つ中、しんがり部隊として、SFサイクロトロンで、自由奔放に研究を楽しむことができたのは幸いでした。その中で、最大の収穫は、ミクロの世界の原子核物理の研究から、研究の目を宇宙に展開できたことです。目に見えないミクロの法則が宇宙の進化に密接にかかわっています。その役割を明らかにし、宇宙の進化のメカニズムと、豊かな地球や人間を構成する多様な元素の起源を明らかにする研究です。

1997年、原子核・素粒子分野の再編に伴い、新たに理学系研究科の中に原子核科学研究センター(CNS)が設立されました。2000年は、SFサイクロトロンのシャットダウン・施設の閉鎖、理研和光地区への引っ越し、理研との共同事業の開始などが集中しました。現役の加速器施設を1年以内に完全更地化する作業と同時に、新規実験施設を和光に導入する仕事を同時進行で進めた時期でした。

いま振り返ると、これらを短期間でやり遂げたことは、奇跡のような気がします。

研究の空白を1年以内にする事ができました。これらは、ひとえに、理研にあわせて東京大学理学部と本部からの絶大な支援と、CNS全員の協力によるものです。とくに、大型新規装置である低エネルギーRIビーム生成分離器(CRIB)を理化学研究所仁科センターに導入し、確固とした共同事業を立ち上げることができました。アジアをはじめ多くの国の研究者との共同研究が進んでいます。

研究面では、新星爆発の過程や、超新星爆発の極初期に起こる爆発的要素合成過程を世界に先駆けて、実験室で直接研究することに成功しました。また、この研究を始めた1988年以降、日本の宇宙核物理研究の発展のために、OMEG (Origin of Matter and Evolution of the Galaxies) という国際会議を1988年からほぼ隔年開くことができました。そしてこの分野が確実に育ちつつあることも大きな喜びです。

しかし、昨年3月11日の福島第一原発の事故は、さらに私の研究の目を、もっ



と人間社会に対しても向けなければならぬということも教えてくれました。原子核物理研究者として社会的責任を痛感しました。早速ボランティアとして福島に入りました。3月、川俣町山木屋地区での最初の子供達の甲状腺検査に、6月には、土壌調査試料採取に行きました。

これからも、原子核物理から宇宙と人間社会に目を向けてゆきたいと思っています。また、CRIBを用いて育った若手が、アジアの各地で、新しい加速器研究計画の中心となって活躍を始めつつあることも楽しみです。

最後に、理学系研究科の多くの皆様、CNSの先輩、同僚の皆様、事務関係の皆様にご多大なご協力、ご支援をいただきました。心から感謝いたします。

久保野茂先生を送る

山口 英斉
(原子核科学研究センター 講師)

久保野先生は、東北大学を1970年に卒業、1972年に同大学大学院にて修士号を取得された後、本学の大学院博士課程に進学、1975年に学位を取得されました。その後米国に渡り、J.H. ウィリアムス研究所、ブルックヘブン研究所にて研究員としての経験を積み、日本に帰国、原子核研究所の助手として、長きにわたり核物理研究を続けられてきまし

た。核反応機構は先生の主要な研究テーマであり、重イオンにおける移行反応測定による核相互作用の研究、原子核内のクラスター構造と炭素や酸素原子核の準分子構造の研究などに顕著な業績があります。

1980年代には、不安定核(RI)ビームを生成する技術が開発され、多くの核物理研究者の注目を集めました。久保野先生はいち早く、宇宙核物理分野におけるRIビームの利用を提唱されました。1997年に原子核研究所は改組され、原子核科学研究センター(CNS)が新しく誕生します。そのCNSにおいて、先生は、助教授、そして教授として、研究グ

ループを指導され続けてきました。先生の主導により、2001年には天体核反応測定を主要な目的とするRIビーム生成分離装置、CRIBが完成します。現在世界には多くのRIビーム施設がありますが、低エネルギー・大強度を特色とするCRIBのRIビームは、今もユニークな存在であり続けています。

先生の国際的な研究展開は、特筆すべき業績です。CRIBにおいて世界10か国以上の研究グループと国際共同実験を推進されるとともに、多くの国際会議の開催に尽力されました。今後も、国際協力研究の要として指導的役割を果たされていくことでしょう。

退職の辞

私が本研究科に職を得てから、今年で18年目になる。研究分野を免疫学から神経科学に転換しようと、長年居たUC Berkeleyからラボを移したのだが、今になって思えばずいぶん無謀なことをしたものである。辞めるにあたってカリフォルニア大学からは何が不満なのかと言われ、日本ではさまざまなカルチャーショックにおおいに戸惑ったが、この10年で何とか一仕事できたのも研究室を含む周りの方々のサポートのおかげと感謝している。とくに、優秀な本研究科の大学院生の努力と大型研究費の助成が無ければ、到底達成できなかつたことであり、研究に協力してくださった方々に深く感謝したい。

さて、この機会に一言と考えてみると、やはり気になるのは昨今の状況である。

坂野 仁 (生物化学専攻 教授)

どちらを見ても泥舟に乗っているような感じのするわが国ではあるが、せめて本学の理学部ぐらいは実学に組みせず本来の理学を追求する研究科であって欲しい。次に事務組織について一言。法人化以来、ずいぶん改革が進んできてはいるが、やはり中央に目の向いた組織という感が拭えず、研究費の30%に及ぶ間接経費を大学に納めながら、それによる支援の実感が研究現場で得られないのはなぜなのだろうか。overheadの本来の目的を理解した研究のサポートと事務組織を含めた大学の真の法人化を望みたい。

もうひとつの懸念はいろいろなところに見られる motivation の低下である。その原因は横並びの日本的社会主義によるものなのであろうが、これにメスを入れなければ本研究科の将来は危うい。最近



東大を抜いたと報道された中国の大学の構内にも打倒平均主義というスローガンが掲げてあった。有能な学生が海外の大学院に流れ、優秀な研究者に魅力を感じさせない大学にならないよう、一刻も早い取り組みが必要である。

以上、ついでながらと余計なことを述べてしまったが、本理学系研究科の国際的 visibility と存在感がいつそう増すことを願いつつ、退職の辞としたい。

坂野仁先生を送る

飯野 雄一 (生物化学専攻 教授)

坂野仁先生は、京都大学生物物理学教室で志村令郎先生の指導を受けられました。ご卒業後はカリフォルニア大学を経てスイスのバーゼル免疫学研究所に渡られ、利根川進先生とともに免疫学の研究に携わられました。あらゆる種類の抗原に対応するための多数の抗体が、限られた遺伝子からどう作り出されるかとの根本的な問いに対し、巧妙に制御されたDNAの組換えによる多様性産生機構を明らかにする多くの業績を挙げられました。カリフォルニア大学バークレー校に移られ、後に教授となられてからも免疫系の研究で活躍を続けられておりました

が、平成6年(1994年)に約20年ぶりに帰国され、本専攻の教授として着任していただきました。日本における若い研究者の教育に携わるべきとの責務を感じ、大きな決断をしていただいたとお聞きしております。同時に神経科学に移られ、嗅覚系の研究に着手されました。ここには免疫学と似た未解明の大問題がありました。すなわち、地球上に存在する無数の匂い物質を動物がいかにかぎ分けて認識するかという問題です。坂野教授は、まず一個の嗅細胞がひとつの嗅覚受容体を選ぶ機構について解明され、さらにはそれぞれの嗅細胞の神経繊維が脳の一か所を正しく選び、脳の上に正確な匂い地図を形成する機構、さらに、嫌な匂いを動物がなぜ嫌だと感じるかという機構などを明らかにされ、*Science*、*Cell*、

Nature などの一流誌に次々とその発見を報じられました。これら超一流の成果は、いずれも当専攻の学生が中心となって挙げたもので、坂野先生の妥協を許さぬサイエンスへの強い意志と、研究室メンバーを駆り立てる牽引力の結果でありました。常々学生に厳しい問いかけを続けられ、上へ上へと導かれ、時には大声で叱責されている姿は強く私たちの印象に残っております。先生は常々、この研究科・専攻は優秀な学生に夢を与え、それを実現させる場でなくてはならないと言われ、まさにこれを具現化して来られました。先生の教え子達は、今現在も世界中で優れた研究成果を作りだしています。先生には今後とも健康にて、目の覚めるようなサイエンスを続けられますよう祈願いたします。

退職にあたって

棚部 一成 (地球惑星科学専攻 教授)

大学院時代の恩師である速水格 (はやみ・いたる) 先生からお声をかけていただき、昭和61年(1986年)に愛媛大学から東京大学へ着任しました。長いものでそれから27年間にわたり、理学部と理学系研究科にお世話になりました。

私はこれまで、豊富な化石記録をもつ軟体動物の中から、アンモナイト類(絶滅頭足類)や二枚貝類を研究対象に選び、それらの生命現象を明らかにする進化古生物学的研究を行ってきました。わが国では、化石を地質時代の決定や古環境復元のためのツールとして扱う地質学的な古生物学が早くから導入されて、地球史の研究や地下資源の探査などに重要な貢献をしましたが、その反面、生物学的な視点からの研究(進化古生物学)は欧米に比べて遅れを取っていました。東京大学地球惑星科学専攻は、この進化古生物学の研究・教育ではわが国における拠点校となっており、その伝統は地質学専攻時代の故花井哲郎先生、速水格先生と門下生によって形づくられてきました。進化古生物学は時間軸の入った生物学と定

義できます。そのため、あらゆる時代にわたり生存したすべての分類群が研究対象となり、また研究手法も野外調査、研究試料の分析や実験、理論的解析などさまざまです。私の研究は野外調査や研究試料の分析に立脚していたため、研究目的に最適な化石標本や現生動物標本を求めて世界中のフィールドや研究機関を回り調査・研究を行ってきました。必然的に海外の研究者との交流や共同研究も増えてきました。とくに、平成4年(1992年)に京都市で実施された万国地質学会議(1992年)でのワークショップ開催や、平成22年(2010年)の第7回国際頭足類シンポジウムの日本開催を実現できたことは、思い出に残っています。

進化古生物学を専門とする研究室が国内の博士課程をもつ他大学には少ないこともあり、学内外から多くの学生が私の研究室に進学してきました。研究テーマの選択にさいしては院生の希望を優先したため、私が扱っていない分類群や手法を選んだ院生に対して適切な指導をできるか不安に思うこともありましたが、彼



らの優れた研究遂行能力や熱意によってこの問題は克服できました。また院生の研究指導にさいしては同僚や他の研究機関の方々の協力を得ることができ、将来を担う優れた研究者を多く育成できたと実感しています。

理学系研究科の運営にはあまり協力できなかったことを反省していますが、定年後はこれまでの研究教育生活で得たものを役立て、基礎科学としての理学の発展のために社会還元したいと思っています。

最後に、在職期間中にお世話になった理学系研究科の皆様、旧地質学専攻と地球惑星科学専攻の諸先生、同僚の方々、研究室の大学院生、学生の方々、研究・教育を支えていただいた技術職員や事務職員の皆様に、心よりお礼申し上げます。

棚部一成先生を送る

遠藤 一佳 (地球惑星科学専攻 教授)

棚部先生は1986年、私がまだ大学院生の頃に、助教授として当時の理学部地学科に赴任されました。私事ながら、ほどなく私は父を亡くしたのですが、その時に青二才の私に先生がとても暖かい励ましの声をかけてくださったことを今でも鮮明に覚えています。一人一人の学生を大切にされる先生のお姿は少なくともその頃まで遡ることができます。

教授となられたのち今日までの約20年の長きにわたり、先生はおもにアンモナイト類や二枚貝類など軟体動物の研

究で世界を牽引し、国内では進化古生物学(生物学的古生物学)のリーダーとして数多くの若手研究者を育成されました。白亜紀末に絶滅したアンモナイト類がどのような生物であったかについて、現在私たちは多くのことを語ることができますが、その主要な部分が棚部先生の一連の研究成果によることは広く知られています。

かつて古生物学では、化石の記載論文の「厚さ」で業績を云々した時代がありました。一時はその反動で、たくさん論文を書くことがむしろ憚られた時期もあったようです。そのような中、単なる記載ではない研究を行い、なおかつ得られた成果はきちんと論文にまとめるといふスタイルを定着させたことは棚部

先生の大きな功績だったと思います。

その意味でいつも見習わねばと思っているのは、先生が学生の書いた投稿用の英文原稿を、遅くとも翌日には添削して返却していらっしゃる。先生の学生への原稿取り立ての厳しさは、一部ですでに伝説化していますが、そのように電光石火のごとく直していただければ、学生も文句の言いようがありません。

お坊さんと古生物学者には長生きの人が多く気がします。先生は、斯界の碩学に授与される日本古生物学会賞(横山賞)を現職で受賞されるほど駆け足で研究教育に没頭されました。ご退職後はやや速度を落とされてもよろしいかと思えます。今後とも末永くご活躍されますことを祈念する次第です。

櫻とヒマラヤスギの間

瀧口 宏夫 (化学専攻 教授)

延べ38年弱、理学部・理学系にお世話になった。その間毎日、安田講堂と化学館の間の道を往復した。確実に2万回以上は通ったと思う。この道の化学館側には櫻、安田講堂の側にはヒマラヤスギの高木が数本ずつあり、私の大好きな空間を形成している。とくに新緑の春から初夏にかけて、両側からせり出した高い梢を通して見上げる空間には、いつも「理学のエーテル」が充満しているような不思議な感覚を覚える。

昭和43年(1968年)に理学部化学科に進学した直後、いわゆる「東大闘争」が勃発した。講義がクラス討論に変更され、学生大会が頻繁に開かれるなど、大学全体が騒然とした状況になった。先生方が学生の追及にたじろぐ場面を数多く見たが、理学へのあこがれが傷つくことはなかった。学問への深い傾倒が窺われる独特の雰囲気をもつ先生が多く、以後約23年間、学生、院生、助手、講師、

助教授として理学部に在籍し、楽しく有意義な時間を過ごさせていただいた。

平成2年(1990年)、住み慣れた理学部から、当時新設された第3セクターの研究機関に移った。7年後、平成9年(1997年)に縁あって理学系研究科に戻り、現在に至っている。不在だった7年間に教授会構成員が大幅に入れ替わり、雰囲気がすっかり変わっていてびっくりした。予算を獲得するための宣伝が重視され、アカウンタビリティという言葉のもと、「わかりやすい研究」とその「そつない実行」が優先されることに違和感をもち続けた15年だった。

量子論を基盤とした「物質文明を支える科学技術」という20世紀型発想は、今その限界を露わしつつある。地球温暖化、資源枯渇、人口爆発、そしてちょうど1年前に起こった原子力発電所の事故などは、この20世紀型発想がもたらした必然であると考えるべきである。次



に来るべきパラダイムシフトは、自然、とくに生命の本質をより注意深く、より多角的に観察し、より深く理解することによって達成されると私は考えている。「何に役立つかを問わない」理学こそがこの発想の転換を誘起することができる。櫻とヒマラヤスギの間の空間に漂う「理学のエーテル」が健在であると信じたい。

お世話になった多くの理学部・理学系関係者に心よりお礼を申し上げます。そして、理学が未来を先導する様子を、できる限り自分の目で確かめて行きたいと思っています。ありがとうございました。

瀧口宏夫先生を送る

山内 薫 (化学専攻 教授)

瀧口宏夫先生は、振動ラマン分光の手法を軸として、常に最先端の分光手法を開発され、溶液における分子の超高速過程を次々に明らかにして来られました。そして、「生命の本質を分子分光で明らかにする」という魅力的なテーマに真正面から取り組んでおられます。瀧口先生が、生きている細胞のミトコンドリアのラマンスペクトル中に生命のラマン分光指標とよばれるピークを見出されたことは、21世紀の生物学にとっての大発見であると私は思っています。私は、「生

命分光学」とよぶべき新分野が開かれようとしていると感じていますが、瀧口先生は、その創始者とよぶべき方です。

瀧口先生は直球勝負の方です。ご自身が「こうだ」と確信されたら、そのようにはっきりと仰ってください。そして、「研究とは、そして研究者とは、かく在るべきである」という瀧口先生の信念に共感し研究の道を歩んだ者は、瀧口先生を慕う多くの学生や研究室の卒業生ばかりではありません。われわれ教員も、瀧口先生のまっすぐな姿勢を見習い、この15年間、本来の方向を違わずに教育と研究を進めることができました。化学教室の教職員一同は、瀧口先生のこれまでのご尽力とわれわれへのご指導に深く

感謝しています。

瀧口先生は、本年4月以降、台湾国立交通大学理学院講座教授として研究と教育に従事されるほか、早稲田大学においても、客員教授として研究プロジェクトを推進されると伺っています。化学教室では、昨年の「化学教室発祥150周年記念式典」の際、藤原鎮男名誉教授のご挨拶によって、現役名誉教授という新しい概念が導入されましたが、私どもは、瀧口宏夫先生が、化学教室の現役名誉教授として、本年4月以降もますます活躍されることを祈念しております。瀧口先生、ありがとうございました。

石の上にも…38年

松本 良 (地球惑星科学専攻 教授)

理学部地学科に進学したのは1970年、東大紛争のため本郷進学が大幅に遅れ、川を歩いて調査する夏の野外実習を真冬の2月にやり、その年のうちに3年夏の長期実習(進級論文)と卒論調査。過密カリキュラムでまともな地質屋は育たなかったのか、あるいはよく鍛えられ時代を牽引する地質屋が育ったのか評価は分かれるところですが、赤レンガ2号館の教室の雰囲気は良く、講義も実習も楽しく幸せな第一歩でした。カナダにすこし滞在しシェンク先生と仕事をしていた時、3億年前のマイクロブ(微生物岩)とチューブワームに出会いました。国際深海掘削にも関わるようになり化学合成生物や深海底の奇妙な氷“ガスハイドレート”がとても気になりました。この時、後の研究の種が仕込まれたといえます。1993年には飯島東先生の後を継いで地質学第五講座(堆積学・堆積岩石学)を担当することになり、2000年には、地学科の3専攻(地質学、鉱物学、地理学)と地球物理学専攻の統合による地球惑星科学専攻の創設という大仕事がありました。異なる歴史と文化、教育カ

リキュラムをもつ4専攻の統合は容易ではなく、いまだ道半ばという感もありますが、対象を同じくする多分野統合のインパクトは大きく、教育研究環境は一新しました。

研究科運営には熱心ではありませんでしたが、敢えて挙げるとすれば新1号館2期工事です。引越しが想定されている地質学教室の建物委員であったため建物委員長となり、当初国際会議場とよんでいた小柴ホールをどこへ置くかの大議論に遭遇しました。十分に高い天井高との強い要請に應えるため、最上階とか地階という案が日建設計から提示され、2フロアぶち抜きという案もありましたが、結局、ピロティー通路の天井を下げることで現在の場所に落ち着きました。

38年間フィールドワークをベースとする研究スタイルは変わりませんが、20数年前から海外調査が容易となり、イランや中国の大学と学術交流協定を結び、日本では見られない先カンブリア時代の地層や大量絶滅の痕跡を追って乾燥した山野を歩き回りました。その中で、絶滅に伴う炭素同位体比の強い急激な負



異常が実は深海底のガスハイドレート分解に依るのではないかとの着想を得、それ以降、フィールドワークに海洋調査が加わりました。ガスハイドレートは環境変動要因として重要なだけでなくエネルギー資源としても期待され、今後益々研究を深化させなくてはならない課題のひとつです。

最後に、お世話になった諸先生、スタッフの方々そして学生諸君に深く感謝しお礼申し上げます。皆さんの御支援と協力、忍耐と好奇心なくして私の研究教育の日々はなかったと認識しています。とりわけ、外国船の備船や外国の国営企業などとの共同研究など前例のない案件では、川合哲史さんはじめ外部資金チームの方々の智慧と発想に大いに助けられました。誠に有り難うございました。

松本さんを送る

浦辺 徹郎 (地球惑星科学専攻 教授)

東京で生まれ、東京で育ち、東京で働く。しかも、修士課程修了後に助手になってから38年間東京大学というのが松本さん(と呼ばせていただく)の息の長い所です。ところが傍で見ていて驚かされるのは、まったく仕事や研究に飽きることがないということです。現在は新潟県上越沖のメタンハイドレートの研究に打ち込んで居られますが、毎年のように自分で航海を計画立案し、学生や仲間を引き連れて乗り込み、着々とデー

タを積み重ねていく手法は、他の誰にもできない力業です。

海の研究では常に調査船が問題になります。それを自前で調達している人はひじょうに少なく、JAMSTECや大気海洋研の公募航海に応募する人がほとんどです。しかし彼は、他大学との共同研究で調達したり、国内・国外の調査船を用船したりと、次から次へと奥の手を出してきました。このようにして松本さんと彼のお弟子さんが明らかにしたメタンハイドレートの成因は、豊富なデータに裏打ちされて、たいへん説得力のあるものになっています。

松本さんの大学院時代の指導教官は故I教授で、今であればパワハラ宝库

のような方でした。しかし、彼は若い頃でも教授から一目置かれる存在であり、教授が毛嫌いしていた理学部職員組合の永年組合員であり続けるなど、教室内で高い信頼を得て来られました。それが専攻統合のさいに大きく発揮され、現在の地球惑星科学専攻の成立に至った大きな原動力となったのです。

松本さんは今後もメタンハイドレート研究が続けられるということで、日本の将来のエネルギー資源の確保という点からも一安心です。自分にも学生にも厳しく接してこられた松本さんの、今後のますますの発展を祈りたいと思います。

大学人生活を終えるにあたって

山形 俊男 (地球惑星科学専攻 教授)

九州大学に奉職後、母校に戻り、早くも20年余りの歳月が流れました。40年近い大学人生活を終えるにあたって、出会った人々の面影などが、早送りの映像のように流れ、感慨深いものがあります。

大学院に入学した頃には大気と海洋に共通の力学を研究する地球流体力学が世界で花開いていました。指導教員の吉田耕造先生は沿岸付近に冷水が湧昇する現象の研究で著名な方でしたが、この現象は回転成層流体が境界付近で外部からの応力にどう応答するかという、地球流体力学の典型的な課題で、とても興味をそそられました。赤道の存在はあたかも境界のような役割をしますので、沿岸湧昇は赤道湧昇とも強い相似性を持ちます。東部太平洋で赤道湧昇が弱まるのがエルニーニョ現象です。こうした現象では、自転の効果と浮力がほどよくミックスしたケルビン波と自転効果の緯度変化による復元力で生じる惑星波が重要な役

割をします。私の研究では、この二種類の波動が常に陰に陽に現れることになりました。木星大赤斑など、時計回りの渦の長寿性を説明する中間地衡流力学、エルニーニョ現象の線形発生理論、海洋大循環モデルを用いたコスタリカドームなどの湧昇ドームの研究、インド洋のダイポールモード現象の発見、海流予測研究や気候予測研究など、すべての仕事に関わっています。吉田耕造先生との出会いは私の研究にとっても深い影響を与えていたのでした。

理学系研究科には優れた教員、学生、内外からのポスドク研究員との素晴らしい出会いがあります。加えて、私には海洋研究開発機構に内外から参集した研究者との交流も新しい発想や国際展開を促してくれました。ウッズホール海洋研究所やプリンストン大学などの海外の機関で出会った人々との交流が、若木が枝を伸ばすように、後輩にまで広がっていっ



たことも、とても嬉しいものでした。

今、東京大学では国際化に向けて「秋入学」の議論が盛んです。理学には国や風土の違いがもたらす境界はありませんから、もともと国際的です。そういう理学者であっても、組織の違いや研究分野の違いで、心の中に境界を築いてしまっているかもしれません。理学者はその生き方においても革新的であるべきでしょう。それには強い「私」の確立が必要です。これを力説した福沢諭吉の「学問のすすめ」が、時を超えて心に響きます。

理学系研究科が革新的な未来を開拓し、いっそう輝きを増すことを期待して筆を擱くことといたします。

山形俊男先生を送る

日比谷 紀之 (地球惑星科学専攻 教授)

山形先生は長年にわたり地球流体力学や気候力学の研究と教育に尽力されてきました。東京大学の大学院を中退して九州大学に助手として移られた頃は、地球流体力学に関わる数理的研究をされていましたが、プリンストン大学での在外研究を機に気候変動予測の研究へと興味の対象を広げられ、エルニーニョ現象の基礎理論の構築、また、東京大学に戻られた後は、インド洋ダイポールモード現象の発見・命名などをされました。さらに、地球フロンティア研究システムの設立や地球シミュレータの導入

など、大型プロジェクトの推進にも貢献されるとともに、大学教育を通じて多くの人材を育成されました。これらのご業績により、日本海洋学会賞、日本気象学会賞、米国気象学会スベルドラップ金賞など数多くの学術賞、および、紫綬褒章を受けられました。

山形先生は学内においても、この3年間、理学部長・理学系研究科長として部局運営を担ってこられました。大学機構改革の中、時代の流れに伴い変えるべきところは変えるが、真理追求という理学の魂は守り抜くという信念の下、数々の困難な状況を乗り切ってこられました。多忙なスケジュールのため、研究室メンバーと共有される時間は激減してしまいましたが、在外研究が転機となったというご自身のご体験を基に、国際的環境に

身を置くことの重要性、国内外研究者とのネットワーク構築の重要性を若手に強調されていました。現在、研究室を巣立った若手研究者の多くが海外で活躍しているのも、先生の推薦と激励の賜物です。

プライベートな山形先生はたいへん気さくなかたです。海外研究者のセミナーの後には、大学院生も交え、懇親会をよく開催されました。お酒の強さは無類で、盃が重なるにつれ、歴史や文学などへも話題が広がり、その話術に皆引き込まれてしまうのが常でした。カラオケもお好きで、興に乗られると最終電車の時間を過ぎてしまわれることも…。

4月以降は、気候予測の応用研究や海洋政策関係などのお仕事を続けられると伺っております。お身体に留意され、ますますご活躍されることを祈っております。

退職にあたって

山本 正幸 (生物化学専攻 教授)

平成元年(1989年)に医科学研究所の助教授から出身学科である理学部生物化学科の教授に赴任して以来、ほぼ23年を理学部/理学系研究科で過ごさせていただいた。医科研時代から生化学の大学院生は受け入れていたので、研究についての路線は固まっていたが、学部教育をはたしてどのように進めていくべきか、当初は茫漠とした大海に放り出された心境であった。生命科学は数学や物理学と違って知識構造が明確でなく、解くべき問題がシャープに見えにくい。むしろどのようなアプローチで研究を進めるかのセンスが後々重要になってくる。担当した「分子遺伝学」では、分子生物学が誕生し、学問として確立していくまでの鍵となる研究成果について、当時の実験そのものに込められた思いを伝えることを主眼とした。しかし、自分が学生の頃の、大学生は主体的に勉強するのがあたりまえという時代から、大学も教育サービス

機関であるという考えに大きく切り替わっていく時代の流れの中で、果たして授業に込めた自分の意図は汲み取ってもらえているのだろうかと自問することも多くなった。教育に対する熱意は持ち続けてきたつもりであるが、正直なところ教育技法は時代に即したアップデートができなかった。また、生命科学も大きく変貌して、個人の頭では整理不可能な量の情報を対象とする時代となった。この状況の中で、何をどのように教えるべきか、もう一度新任教授の立場で一から考え直してみると言われても、はたと困惑しそうである。世代交代の時期が来た実感する。研究に関しては、伝統を作るといような学風ではさらさらなかったが、卒業生たちはそれぞれの分野で活発に活躍してくれている。自分で今少し研究してみたいテーマが残ってはいるが、研究についても、昔風の表現で言えば、後進に道を譲る時機がきたと自覚してい



る。幸いなんとか健康を保っており、日々やるべき仕事もそれなりに頂いているので、大学は退いても、学術・科学の発展のためにいささかなりとも力を尽くしていきたいと考えている。

末筆になってしまったが、これまでの研究教育活動を支えていただいた歴代の専攻事務のみなさん、研究科長時代にさまざまな問題処理に尽力して下さった理学部事務部のみなさん、そしてひとつの時代を共に過ごした研究室の卒業生、スタッフ、秘書さんたちにあらためて深く感謝の意を表し、退職の辞といたします。

山本正幸先生を送る

渡邊 嘉典 (分子細胞生物学研究所 教授)

山本正幸先生は、1981年に本学医科学研究所遺伝子実験施設の講師となられ助教授を経て、1989年に理学部生物化学科教授に着任されました。その後は、大学共同利用期間である基礎生物学研究所および国立遺伝学研究所の客員教授なども併任されました。また、2007年からの2年間は理学部・理学系研究科長を務められるなど、理学系研究科に多大な貢献をされてきました。

先生は、分裂酵母をもちいた有性生殖の開始機構の研究を大きな柱として、減

数分裂の制御機構および栄養源情報伝達系の解析などにおいて、世界をリードする成果を多数あげて来られました。先生の研究スタイルは、まさに「理学の中の理学」といえるもので、ユニークな研究課題をとことん理詰めと緻密な実験によって突き詰め、独自の研究分野を築き上げてこられました。先生の研究に対する真摯な姿勢は徹底しており、その成果に対する信頼感は絶大なものがあります。また、研究室の大学院生、若手研究者に対する忍耐強い愛情のこもった教育姿勢は、先生の寛大なお人柄の上に築かれたもので、将来を見据えた卓越したものであったことに気づかされます。そこで教育を受けた子弟は、先生の理学の精神を受け継ぎ、研究・教育の分野で

多数活躍しています。

先生は、ご自身の研究室の運営、専攻・研究科の発展にとどまらず、日本分子生物学会の会長、日本学術会議などの要職も務められ、日本の分子生物学の興隆に多大なご尽力をされてきました。先生にはこの定年を期に、文字通り引退されてゆっくりとお好きな囲碁や音楽観賞三昧の日々をお過ごししていただきたいところですが、周りはまだそれを許してくれません。すでに、かずさDNA研究所の所長として、ご自身の研究の継続とともに研究所の運営に当たっておられると聞いております。今後も、日本の分子生物学の発展のためにご助言をいただけることを期待するとともに、先生のご健康とご活躍を祈念いたします。

青木健一先生を送る

井原 泰雄
(生物科学専攻 講師)

理学部に赴任されたのが1988年とのことですから、私が学生として駒場に通い始めた頃、青木先生はすでに数年間本郷で教鞭を執られていたことになりま
す。当時の私は、本郷に行ったら進化や適応の研究をするのだと端から決め込んでいたわりに、どの学部どの学科に進むべきなのかについては、ろくろく考えもせずすましていました。いざ進学振り分けという段になり、目星を付けたどの学科のカリキュラムにも進化とか適応とかの文字がないことを悟ったとき、思いがけず見つけたのが、当時の生物学科人類学コースと、そこで社会行動の進化を研究されていた青木先生でした。

青木先生は1980年に米国ウィスコンシン大学でPh.D.を取得され、国立遺伝学研究所を経て、本学には助教授として着任、1994年には教授になられました。生粋の理論家であり、人類進化にまつわる多くの難題に対して、一貫して理論集団生物学的な取り組みをされてきました。そもそも人類学は理科と文科の境界に位置する「辺境」の学問ですから、理科の「中央」に立て籠もってはいは本当に面白いことは見えてきません。理科の道具を携えて文科との境界を跨いでいく—そのような学際性が、青木先生の「文化の理学的扱い」や「遺伝子と文化の共進化」に関する一連の研究に、端的に示されていると思います。またここ数年は、旧人ネアンデルタールと新人サピエンスの交替劇を説明する「学習仮説」について、国内外の研究者との共同作業をますます活発にされているようです。



■ 青木健一教授

さて、進学振り分け後の私は、いずれも独特な人類学の講義、わけても異彩を放つ青木先生の講義に接することになったのでした。その後、大学院では研究の指導をしていただき、最近では講座の同僚としてもたいへんお世話になりました。このたび定年退職を迎えられ、いよいよもって学問に専念されるおつもりだろうと思っています。

